

# 大草平

星野村文化財調査報告書

第 1 集

1983

星野村教育委員会

## 序

大草平遺跡は福岡県八女郡星野村大草に所在する。

水縄山脈の北側中腹に在り、急傾斜地の多い星野村では割合と平坦な台地である。

星野村では、水縄山系を中心に縄文時代の遺跡が点々と見受けられるが、この大草平遺跡はその中でも広範な代表的な遺跡である。

今回の発掘調査は、大規模な土地開発が進む中で花木園造成に伴い、星野村教育委員会が福岡県教育委員会の協力指導を得て実施したもので、ここに報告書を発刊するはこびとなりました。

本書は年々失なわれてゆく埋蔵文化財について、一層の御理解と御協力を願う一資料として役立てていただければ幸いです。

最後にこの発掘調査にあたり、数々、御配慮いただいた福岡県教育委員会ならびに発掘作業にご協力いただいた地元の方々に深甚の謝意を表します。

昭和58年 3 月31 日

星野村教育長

山 口 一 二



## 例 言

1. 本書は星野村が国・県費の補助を受けて昭和57年度に実施した福岡県八女郡星野村字大草所在遺跡の報告書である。
2. 本書の題字は星野村村長 倉住 茂氏に揮毫していただいた。
3. 掲載写真、実測図の作成は調査員があたり、挿図の整図は豊福弥生氏の助力を得た。
4. 銅矛の写真については九州歴史資料館石丸洋氏の撮影であり、チンのウバ塚出土の海獣葡萄鏡は星野村教育委員会蔵の写真を復写した。
5. 本書の執筆は、I－1、I－3のうち遺跡を栗秋恵二、I－2を宮小路賀宏、他を木下修がたった。
6. 本書の編集は木下が担当した。

## 本文目次

|                  | 頁  |
|------------------|----|
| I はじめに           |    |
| 1 はじめに .....     | 1  |
| 2 調査の経過と概要 ..... | 1  |
| 3 周辺の遺跡と遺物 ..... | 3  |
| II 層序と遺物分布       |    |
| 1 層 序 .....      | 11 |
| 2 遺物の分布状態 .....  | 12 |
| III 遺構と遺物        |    |
| 1 遺 構 .....      | 13 |
| 2 先土器時代の遺物 ..... | 13 |
| 3 縄文時代の遺物 .....  | 15 |
| IV おわりに .....    | 19 |
| 附 銅矛と和鏡 .....    | 21 |



第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000 久留米・日田)

A 大草平遺跡

- |             |             |          |            |
|-------------|-------------|----------|------------|
| 1. 大瀬耳納遺跡   | 2. センドングラ遺跡 | 3. 炭床遺跡  | 4. 山神遺跡    |
| 5. 光延遺跡     | 6. 一木遺跡     | 7. 千々谷遺跡 | 8. こうもり岩洞穴 |
| 9. 縫尾遺跡     | 10. 和鏡③出土地  | 11. 室山神社 | 12. チンのウバ塚 |
| 13. 妙見城跡    | 14. 鷹取城跡    | 15. 岩野遺跡 | 16. 宮蔵遺跡   |
| 17. 懷良親王御墓所 | 18. 星野氏墓所   |          |            |

# I はじめに

## 1. はじめに

大草平遺跡<sup>おくさんひら</sup>は、福岡県八女郡星野村字大草に所在する。当該遺跡の所在する山腹が、花木園造成に伴ない整地されるため、埋蔵文化財の緊急調査として星野村が総額200万円の国庫補助を受けて実施した。

調査関係者は次の通りである。

総括 星野村教育委員会教育長 山口 一二

事務担当 同 社会教育係長 栗秋 恵二 同 総務係長 末崎 時男  
同 総務係長 藤崎 正昭 同 総務係 鶴元ひとみ  
同 社会教育係 野中 大寿

調査担当 福岡県教育委員会文化課調査第一係長 宮小路賀宏 主任技師 木下 修  
主任技師 酒井 仁夫 主任技師 池辺 元明

発掘調査作業員 今村マリ 今村ツイ子 今村フジカ 今村チエ子 山下ミツ子 樋口マミ子 山手シツ子 樋口安子 樋口ハル子 栗秋しづ子 笛田ミツ子 笛田しのぶ 宮原ミエ子 樋口よう子 田中カツエ 笛田ひとみ 笛田トミ子 山口サグミ 石川チエ子 井上裕子 山口つぎえ 黒谷純子 山口つるえ 神谷ハルエ 樋口宏 今村真一郎 山口アサエ 山科ミサ子 柴田ヒデ子 柴田泰恵 末崎けい子 梅野京子

その他に、今村誠司氏をはじめ、第3東区長・笛田厚一郎、第5区長・今村義友、棕谷小学校、小野小学校、星野小学校、大円寺、今村寿司、仁田原小学校校長・谷川晃一、佐々木隆彦氏には調査及び整理作業において御世話になった。記して謝意を表します。

## 2. 調査の経過と概要

星野村と云う名を聞いたのは、今から15年程前のことである。当時福岡県教育委員会における文化財行政の担当は社会教育課に在った。社会教育の担当者川崎隆夫（故人）氏から酒を飲むたびに聞かされたものである。村の山・川・金山・村人のことを。川崎氏は昭和30年代の後半に、新生活運動を通して村に入り、活動を行ったことに深い思いと印象を持っていた。特に日本の第二次世界大戦の終焉を与えた広島への原爆の投下、その時の火種がこの山村に引き継がれて、役場の前に燃えていることを村人の平和を願う表徴として話していた。

社会教育活動ののち、山村振興計画が実施され、静かな村にふさわしい茶と花木の産地とし

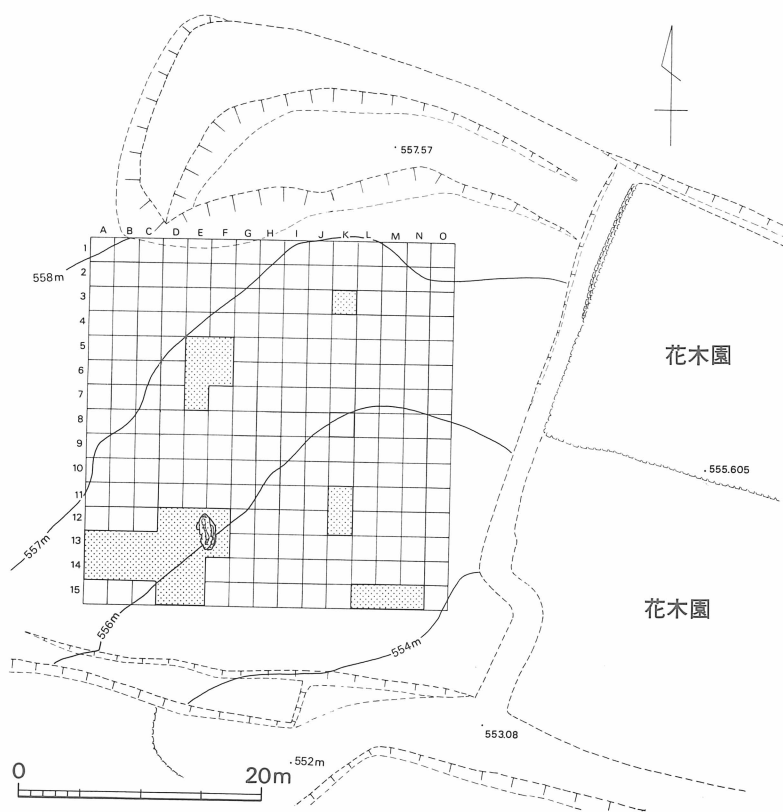
て発展した。

その後、私用で星野村を訪れることがあったが、征西將軍宮懷良親皇の足跡、チンのウバ塚と云う古墓から海獸葡萄鏡二面が出土したことなどを知るにつれ、川崎氏の話しとともにこの村に不思議さを感じた。折から、山の急斜面に丹念に造られた田畑の畔に咲く彼岸花が美しく、池ノ山と云う自然湖の景色とともに何時の日かこの村で古代遺跡の調査に参加することができたらと思っていた。

昭和52年10月25日、星野村字一木において、旧石器及び押型文土器等 100点余が発見されたことが読売新聞紙上で発表された。発見者は在住の村役場職員栗秋恵二氏で、氏は村内各地において遺物の採集を行い、遺跡の所在を明らかにしておられた。大草平遺跡もこの一つであった。

昭和56年6月、当大草平遺跡に隣接する地区において花木園造成が計画された。星野村教育委員会は、遺跡の保護について県教育委員会文化課に協議された。文化課は、主任技師副島邦弘・技師伊崎俊秋を現地に派遣し、事前の調査が必要であることを認めた。しかしながら、諸種の事情から造成計画に支障しない調査のセットが不可能なことから、地権者である今村誠司氏の承諾を得て昭和57年度に調査を実施することとなった。

遺跡は、耳納山脈山稜にある合瀬耳納峠の西方約2.35kmに在る頂部(三角点:650.4m)から西南に派生した尾根上にあり、頂部から約1km下った所である。遺跡は、東側が現在花木園として造成さ



第2図 遺跡地形図と調査区 (1/600)

れて開けているが、本来は東と西に流れる山稜の分脈点、つまり南に開口する谷の谷頭に位置している。標高 555m を前後する平坦に近い地形である。東西約20m、南北約27m の範囲が調査対象地区である。

発掘調査は昭和57年 8 月23日から 9 月18日の間に実施された。磁北に合せて東西南北に 2 m の方眼を切り、西から A ～ R、北から 1 ～15 とグリッドを設定した。調査することによって判明したが、以前に開拓の手が入っていて、東半部は深く攪乱され、全体に遺存状態は良好ではなかった。南西部分において石器・剥片等が集中して発見された。

調査したグリッドは、A-13・14、B-13・14、C-13・14、D-12～15、E-5～7・12～15、F-5・6・12・13、K-3・8・11・12、L-15、M-15、N-15である。

遺跡の南方約70mの地に湧水地がある。年中涸れることない清冽な水で、星野の茶はこの水が最もうまいと感じた。原始の時代においては欠くことのできない湧水地であったことと考えられる。

### 3. 周辺の遺跡と遺物

大草平遺跡は、福岡県八女郡星野村字大草に所在する。星野村は福岡県の南部八女郡の東部に位置し、東西に細長く地勢は概ね急峻であり雨量が多い。

東に 960m の熊渡山を背にして大分県日田郡に、北は 600～ 800m の山が連なる耳納山脈で浮羽郡と、南は 940m の石割岳から 570m の高牟礼に連なる山で黒木町に接している。西部は比較的低い山脈で上陽町を経て筑後平野に開ける四方を山に囲まれた山村である。

矢部川の支流である星野川とその支流沿いに住家が散在し、道路も河川沿いに走って各集落を結んでいる。

総面積の82%が山林で耕地が少く、山腹の緩傾斜地に造成した樹園地が最近多くなっている。

このような地域の中で、大草平遺跡は星野村の北部水繩山脈の中腹に位置し、標高 555m の地点にある。急傾斜地の多い星野村の中では比較的平坦な高原である。この遺跡周辺には縄文時代の遺跡が多く、合瀬耳納遺跡、センドングラ遺跡、炭床遺跡、山神遺跡などがある。

西部の低地には光延遺跡があり、縫尾遺跡からは弥生時代の土器の出土があったと伝えられている。

北部の低地には一木遺跡があり、河原石を用いた舟型のプランの石室があったが、現在は道路拡張工事でなくなっている。

現在の村の中心地十竈<sup>じゅうこう</sup>より上流に千々谷遺跡がある。星野川支流の龍川内と合流をなす附近には縄文から弥生までの遺跡が散在している。



弥生時代中期の青銅製矛2（図版10）もこの附近から出土した可能性が大きい。

古墳時代末期の積石塚双円墳、チンのウバ塚は星野川に寄った所にあり、ここからは海獣葡萄鏡2面と銀のカンザシが出土したが、現在は国立博物館に保管されている。この時代から大陸文化とのかかわりが星野村から出て来る。

有史以後、文献に出て来るのは、大宰府観世音寺の末寺としての、西部、土穴の大円寺であり、この頃、星野村は5郷8庄ありといわれていたとの記録がある。

以後、鎌倉時代には星野氏の出現により、四方を天然の要壁に囲まれた妙見の地として、勢力をふるった。

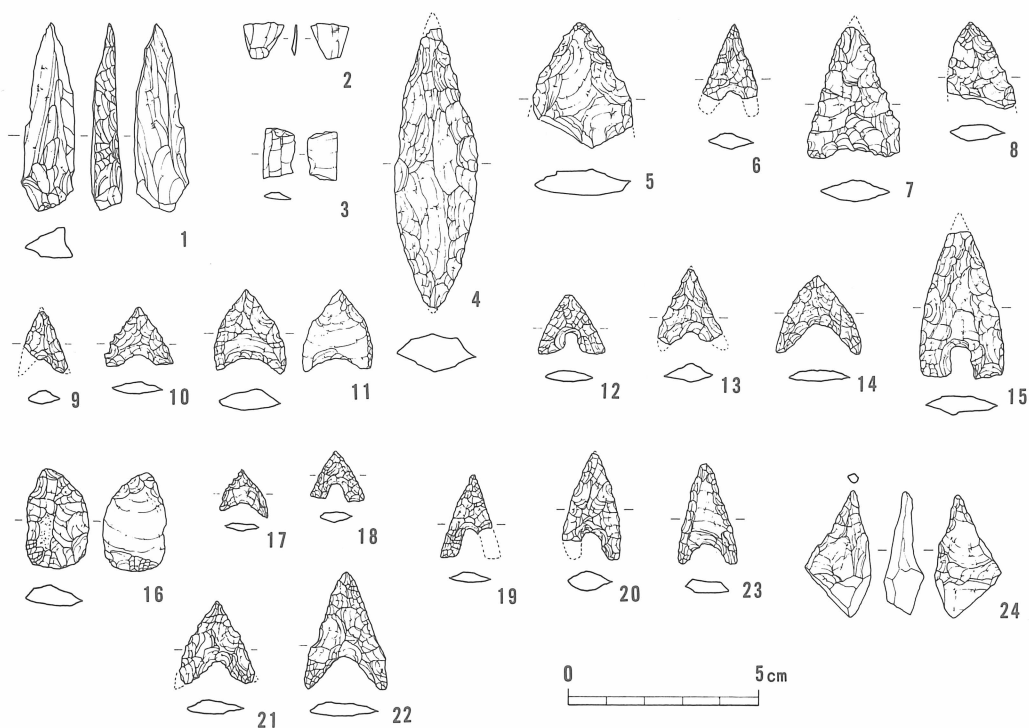
以下、星野村における各遺跡の概略を記するが、遺物は椋谷・星野小学校・星野村資料館（大円寺）および栗秋蔵である。

参考文献 江頭 享 「郷土史物語」 1968

#### ① 大瀬耳納遺跡

星野村字古道にあり、県道八女～香春線の浮羽町との界附近にある。前方、西側が開け、標高 560mの高地にあり、縄文時代の石鏃や土器片が出土した。

#### ② センドンダラ遺跡



第3図 周辺遺跡出土石器実測図1 (1/2)

大草平遺跡の下流に位置し、縄文時代の石鏃が出土している。

**石鏃**（第3図6） 両脚端部を欠損する。凹基無茎式で、わたぐりは深いようだ。良質の黒曜石製。

### ③ 炭床遺跡

大瀬耳納遺跡の東南に位置し、縄文時代の縦型石匙が出土している。

**石匙**（第4図30） 縦型石匙の完形品。幅広・縦長の剥片を素材とし、荒い剥離で大きなつまみ部を形成する。主要剥離面側から丁寧な調整を加え刃部を作る。側面には原面をそのまま残す。長 7.6cm、最大幅 4 cm、厚 1 cm、重 30.5 g、安山岩製。棕谷小学校蔵。

### ④ 山神遺跡

星野村山神に位置し、標高 400 m の高原である。四方を山に囲まれ、自然の清水がわき出る地で、縄文時代早期～中期の遺跡である。石斧・石匙・スクレイパー・石鏃等のほか、土器片も出土している。

**尖頭器**（第3図4・5） 4は両端の一部を欠失するが、最大幅を中央部に持つ柳葉形の尖頭器である。1 cmと部厚い横長剥片を素材とする。筑紫郡那珂川町深原遺跡出土のものに類似し、縄文早期押型文土器に伴出するのであろう。重 17.8 g で安山岩製。5は石鏃を大型化した形態で、尖頭状石器と称される。基部を欠き、荒い剥離を施す。安山岩製。

**石鏃**（第3図7～15） いずれも凹基無茎である。7はわたぐりの浅い大型品。重 3.7 g。8は基部を欠失する。あるいは尖頭状石器かもしれない。9は二等辺三角形、10は三角形を呈す。11は剥片鏃で縁辺に荒い調整を施す。12は脚端の平坦な鏃で、押型文期に出現する。14も押型文土器と共伴する鏃で、完形品。長 2.1 cm、幅 2.2 cm、厚 0.3 cm、重 0.8 g と中型品の割に軽量。15は先端を欠く大型の鏃。8・12は黒曜石製で、他は安山岩製。

**石匙**（第4図26～28） 26・27は横型石匙である。26は外弯刃で、大形の横長剥片を素材とする。小さなつまみは入念に調整される。両側辺は表・裏から折断されている。幅 7.4 cm、厚 0.7 cm。27は小型で内弯刃である。つまみ部は高く作られる。幅 4.5 cm、厚 0.6 cm、重 5.6 g。28は小型の縦型石匙。横長剥片の一辺をつまみ部とする。厚 0.53 cm、重 3 g。いずれも安山岩製。

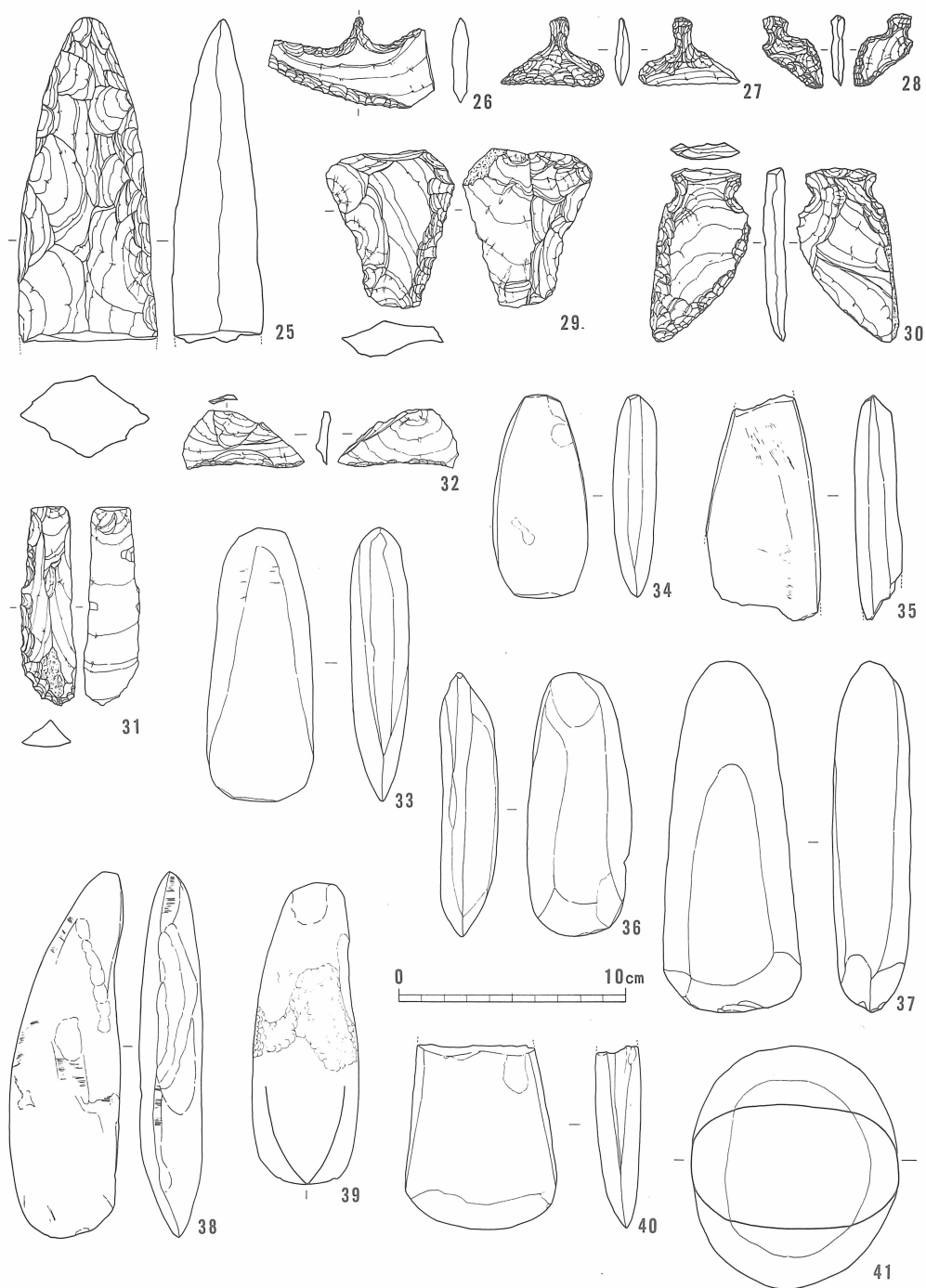
**磨石**（第4図41） 長円形の磨石で全体に磨痕がある。凝灰岩製。他に数点出土している。

**削器**（第4図29） 台形状に近い剥片の一部に刃部を有す。

**石斧**（第4図33） 蛤刃石斧の完形品。刃部は鋭く、体部には横方向の砥ぎ痕が残る。長 12.1 cm、幅 4.7 cm、厚 2.5 cm の硬砂岩製。4・7・15・26・27・29・33・41は棕谷小学校蔵。

### ⑤ 光延遺跡

星野村の最西部に位置し、日当りの良い台地をなすところである。石鏃の他、土器片も出土している。この附近で、海獣葡萄鏡が出土したとの言い伝えもあるが、出土品については未



第4図 周辺遺跡出土石器実測図2 (1/3)

だ未確認である。

**石鏃**（第3図16） 黒曜石製の部厚な縦長剥片を素材とする平基式である。打痕は荒い調整でカットする。一部原面が残る。長 2.7cm、幅 1.7cm、厚 0.6cm、重 2.8g。棕谷小学校蔵。

#### ⑥ 一木遺跡

星野川の支流、広内川と轟川の合流点の上流にあり、県道拡張工事の時、発見された遺跡で、標高 250m である。附近の自然石で構築された、長さ 8m、幅 4m、高さ 70cm の石室があったが、道路拡張の時取り除かれ今はない。

この遺跡からは尖頭器、ナイフ形石器、押型文土器が出土しており、星野村の中でも古い時代に属す遺跡である。

#### 土 器（図版9、第5図）

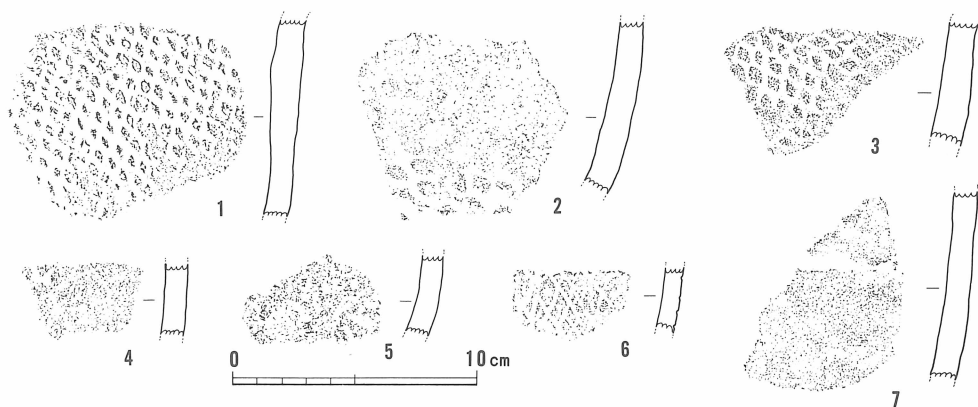
1～7はいずれも楕円押型文土器の胴部破片である。楕円文の粒は大きく、器壁も厚く 1.3cm 前後ある。文様及び器形からして田村式であろう。6は撚糸文と考えられる破片で網目状をなす。前期前半であろう。7は無文土器で、外面には指による押圧が見られる。1～5の押型文土器に伴出するものか。

**ナイフ形石器**（第3図1） 部厚な横長剥片を素材とする。一辺のみに90° 近い刃潰し加工を施す。長 5cm、幅 1.4cm で安山岩製。

**台形石器**（第3図2） 縦長剥片を主要剥離面側から折断し、台形状に整えた石器で、刃潰し加工は無い。長 0.9cm、幅 1.1cm、厚 1.5mm で黒曜石製。

**細石刃**（第3図3） 幅 8mm ほどで、中間部片。黒曜石製。

**石鏃**（第3図17～22） 10点採集されている。いずれも凹基無茎である。17・18は小型品で、17は長 1.3cm、重 0.2g。18は脚端部が平坦で台形に近いわたりを有す。長 1.4cm、重 0.35g。19は同型だが脚が長い。21・22は脚が大きく拡がり、端部が鋭る。22は完形品で、長 3.2



第5図 一木遺跡出土土器拓影 (1/3)

cm、脚端幅 2 cm、重 1.6 g。19は黒曜石製で他は安山岩製。

**尖頭器**（第 4 図 25） 安山岩系の石材を用いた木葉形尖頭器で、半分前後を欠失する。両側縁から荒い剥離を施す。厚 4 cm に近い。

**削器**（第 4 図 31・32） 31は縦長剥片の一側辺と末端部に調整を加え削器としたもの。断面は三角形で一部原面が残る。あるいは先土器時代の所産か。長 8.7cm、幅 2.3cm、厚 1.2cm。32は扇状の横長剥片を用い、その末端部に刃部を作る。剥離は粗い。縄文時代である。両者とも安山岩製。

**石錐**（第 4 図 24） 部厚な剥片の打点部に調整を施し、錐としたもので、先端部は磨滅している。安山岩製。

#### ⑦ 千々谷遺跡

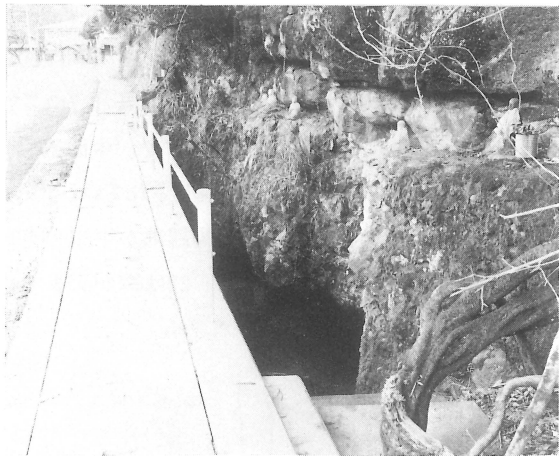
星野村の中央部にあり広範な地である。星野村の中心地に近く、縄文から弥生、古墳時代までの遺跡である。石鏃・石斧等が出土している。

**石鏃**（第 3 図 23） 縦長剥片の末端部を、鏃の先端に用いる。中央には剥離面を大きく残す。長 2.7cm、重 1.4 g で安山岩製。

**石斧**（第 4 図 34～37） いずれも蛤刃石斧で 34は小型品。35は刃部を欠く。体部には斜・横方向の研磨痕が残る。37は弥生時代大型蛤刃に近いが、厚みがややない。34は蛇紋岩、他は安山岩系の石材を用いる。4 点とも星野小学校蔵で、校庭より出土した。

#### ⑧ こうもり岩洞穴

星野村田の原に位置し、星野川のすぐ右岸の凝灰岩を侵食してつくられた洞穴であり、中の広さは約 100m<sup>2</sup>程度ある。遺物については、現在のところ確認はしていないが、先土器時代～縄文時代の住居としては適しており、発掘調査をしたい遺跡である。



第 6 図 こうもり岩洞穴近景

#### ⑨ 縫尾遺跡

星野村の西部入口にあり、星野川の左岸である。遺跡は現在は住宅の下になっており存在しない。遺物は弥生時代の土器があった。

#### ⑩ 和鏡出土地

星野川の蛇淵橋上流の堆積地で、川遊びにいった中学生が拾ったものである（図版 10-3）。

#### ⑪ 室山神社

西暦 1226 年（嘉禄 2 年）星野の地頭職星野八郎胤実が紀州熊野権現を勧請して建立した神社



第7図 チンのウバ塚全景



出土海獸葡萄鏡

である。

⑫ チンのウバ塚（第7図）

西暦 650年頃に造られたものであるといわれ、構造は、星野川の川石を積みあげて築いた塚で積石塚双円墳とされ、大きさは東西 5 m、南北に 3 mあり、僧籍にあった人の墳墓といわれている。

明治36年 9 月、海獣葡萄鏡二面と銀のカンザシが出土し、現在二面とも東京国立博物館に所蔵されている。古墳時代後期以降の塚である。

海獣葡萄鏡（第7図下）

二面出土した。チンのウバ塚が終末期古墳であり、その副葬品であったという証左はない。後藤守一氏の解説があるのでのせておく（註1）。

海獣葡萄鏡 筑後国八女郡星野村出土

「出土遺跡の性格を明らかにすることが出来ない。二面とも刻鏤鮮明、出土鏡としては類稀な美鏡である。……」

1 面は径12.1cm、他は10.3cm。

⑬ 妙見城跡

西暦1208年（承元 2 年）星野八郎胤実が本星野に居を構えて以来約 380年、筑後上郡に勢力をふるった星野氏の本城跡である。現在、内城・外城の地名が残っている。

⑭ 鷹取城跡

規模 東西42間（約75.6m）、南北10間（約18.0m）。星野氏18代星野中務大輔鎮胤の居城であり、耳納山脈の鷹取山頂にある。

東、南のゆるやかな山なみが星野村、東北、北、西側は切りたった急斜面で浮羽郡・三井郡・久留米市にのぞんでいる。

遠く甘木市、朝倉郡を一望に見られる眺望佳絶の地であり、難攻不落、水にも恵まれた天然の要所である。

⑮ 岩野遺跡

石斧（第4図38・39） 星野村資料館蔵で、茶畑の開削によって出土した。頭部付近で片方がくびれ、頭部がその方向にくびれた磨製石斧である。38は長16.2cm、厚 2.8cm。体部は横方向の細かい研磨で、側面では平坦に近い部分もある。蛇紋岩製。39は長13.1cmで硬砂岩製。当種の石斧は嘉穂郡桂川町北古賀遺跡出土の通称「北古賀式石斧」に類似する。縄文時代後期後半頃の所産であろう。

⑯ 宮蔵遺跡

石斧（第4図40） 揆形の磨製石斧で、刃部に最大幅 6.6cmがある。硬砂岩製。

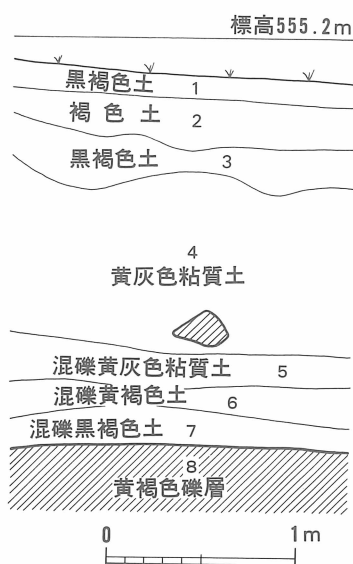
註1 後藤守一編 「古鏡聚英 下篇」 東京堂出版 1977 図版第六の解説による。



## II 層序と遺物分布

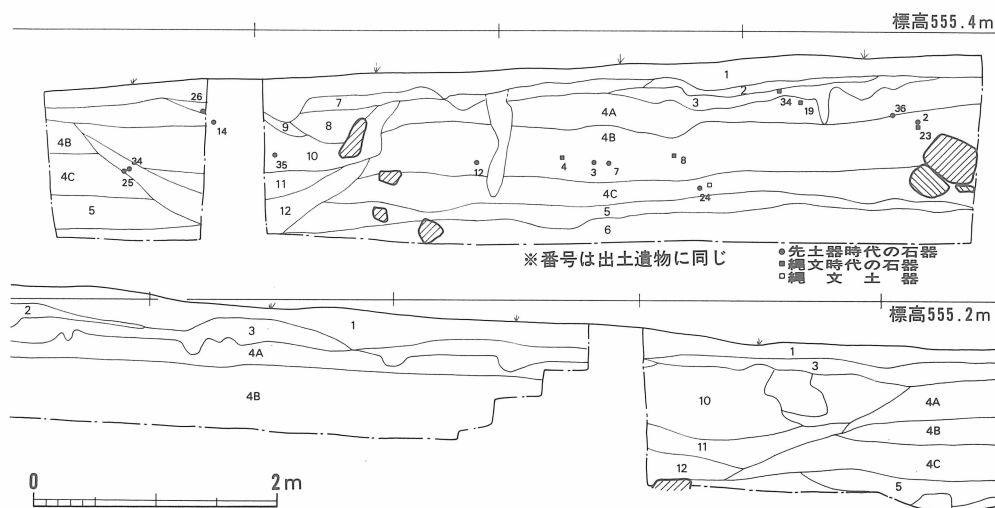
### 1. 層 序 (図版 3)

遺跡の基本層序は、第 8 図の通りである。この土層は遺跡の南端の削平面に現われている。1 層は黒褐色の表土層で層厚 10cm。2 層は褐色土で 20~30cm。3 層は黒褐色で若干粘質を帯びる。層厚 20cm。4 層は黄灰色粘質土で上層とは不整合面をなす。層厚は 80~90cm である。D-12・13 区ではこの層が 3 枚に分かれる。4a 層は黄灰色粘質土で性格は同じ、約 20cm。4b 層は黄味が強く、より粘性に富む黄褐色粘質土で 40cm 前後ある。4c 層は赤色の粒子を含む赤斑褐色粘質土で 20~30cm の層厚を有す。この層には角閃安山岩の頭大の礫を多く含む。この礫は磨石・凹石の素材ともなっている。5 層は混礫黄灰色土層で若干粘質を帯びる。層厚 20cm。6 層は混礫黄褐色土で 10~20cm。5・6 層には指頭大の黒曜石の原石を多く含む。7 層は混礫黒褐色土で 20cm。それ以下は風化の進んだ黄灰色礫層が続く。



第 8 図 基本土層図 (1/40)

D-12~14 区の土層図でも判るように、上部 3 層までは削



第 9 図 D-12~14 区、A~E-14 区 土層図 (1/60)

平されている。またD-14区のように新しい落ち込みが見られる。

遺物は4 a層～4 c層に集中し、5層でもわずかだが安山岩の削片が出土した。先土器時代の石器は4 c層に多く出土したが、縄文時代の石鏃類よりも上層より出土したりで、層位的に混乱が見られる。資料的にも少ない点、良好な遺存状態とは言えない。

なお、9～13層は新しい落ち込み内の土層である。

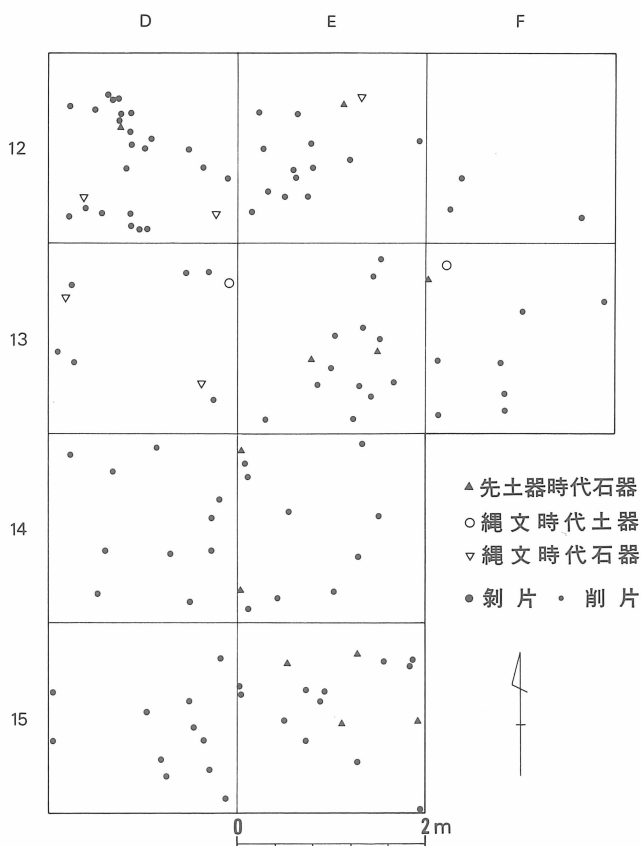
## 2. 遺物の分布状態

遺跡の東側に設定したK列のグリッド(K-3・8・11・12)、L・M・N-15区のグリッドでは、下層まで攪乱が著しく、K-8区3層より石鏃1点が、また、K-11区の攪乱層より前期の塞ノ神式土器数点が出土したに過ぎない。

E-5～7区、F-5・6区では、若干の剥片と黒曜石の原石が4層にて出土した。

第10図はD・E-12～15区、F-12・13区の4層(a～c)の遺物分布状態である。遺物は当該区とA～C-13・14区に割合多く出土したが、その大部分は石器であり土器はわずか数点である。先土器時代の石器はE-13区で細石刃核2点が、E-15区では細石刃3、搔器1が出土した。縄文時代の石器はD-12区で石鏃1、磨石1、D-13区で石鏃2が出土し、少ない遺物量ではあるが、北側のやや高所に縄文時代、台地の端部に先土器時代の遺物が分布する傾向が窺える。

遺物の分布状態を土層に投影したのが、第9図である。D-12区では縄文時代の石器と台形様石器が混在し、D-15区では細石刃がかなり上層より出土した事が判る。これらの点から、4層は古い時期において攪乱されたと考えたい。



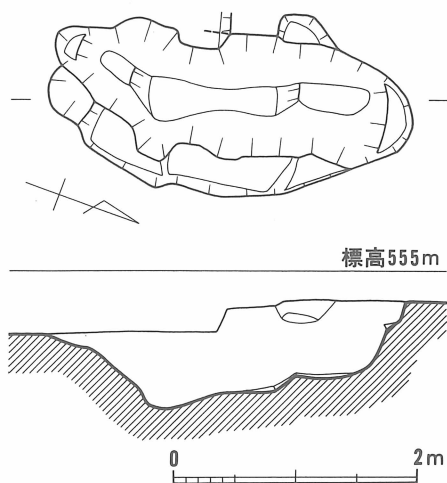
第10図 遺物分布状態 (1/80)

### III 遺構と遺物

#### 1. 遺 構

E・F-12・13区に検出された長円形の土塋である。第2層の褐色土を切り込んでおり、長径2.95m、短径1.32mを測る。底面は幅20~40cmで、北側に20cmほどの段を有し、高い。最深部は上面から85cmの深さがある。塋内の堆積層は、上部は耕作土に近いが、下部になると黒褐色土になる。出土遺物は第14図5・6の細石刃核、条痕文土器（第15図2）である。

土塋の時期は切り込み面からして近世頃で、性格については不明で、遺物は混ざり込みである。



第11図 土塋実測図 (1/60)

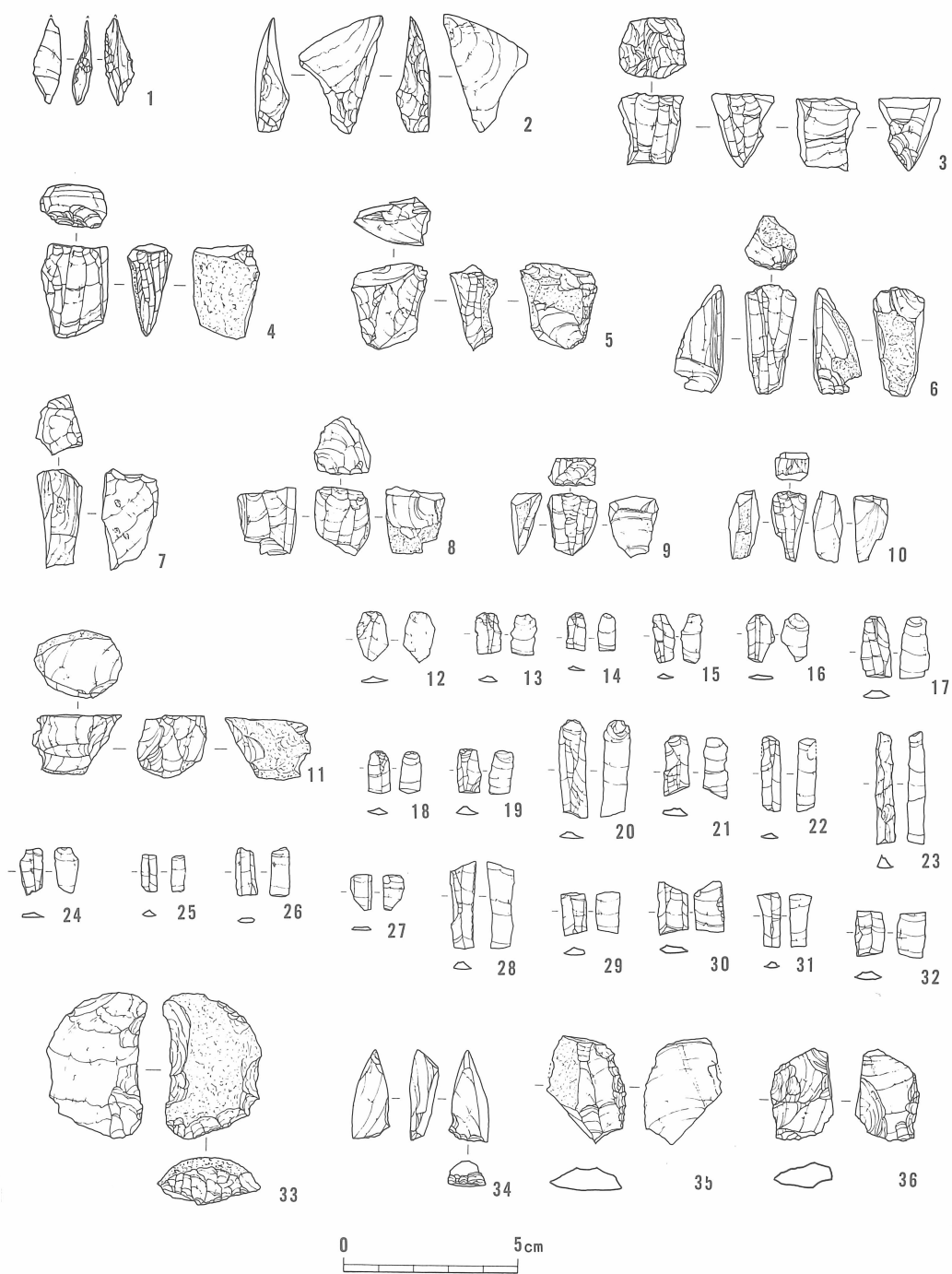
#### 2. 先土器時代の遺物 (図版5、第12図)

石器の種類はナイフ形石器・台形石器・細石刃核・細石刃・搔器・削器の他に、剥片・削片等があるが、前述したように、層位が不安定で、遺物が混在した状態で出土したので剥片については除外した。出土数は17点と少ないが、C~E-12~14区の3~5層に多く出土した。ここでは採集資料も含めて報告する。

**ナイフ形石器 (1)** 小型で、先端部を若干欠く。縦長剥片の打点部を基部側にとり、主要剥離面側から一側縁に粗雑な刃潰し加工を加える。長 2.6cm、重 0.8g。黒曜石製で、C-13区4a層出土。

**台形様石器 (2)** 長軸に対し、幅広で斜めの刃部を有す。基部に最大厚を有す。両側縁に主要剥離面側から刃潰し加工を施す。長 3.3cm、刃部幅 2.7cm、厚 1cm、重 4.7gで、安山岩製。E-12区4a層出土。

**細石刃核 (3~11)** 形態・原面から3つに分けられる。1類は四角錐状の素材を用い、側面に原面を残さないものである。3は平坦で四角い打面を有す。側面は上方および下方からの剥離。2類は4~6、8~10でやはり角錐状の素材を用い、側面ないし細石刃剥出面と反対側に原面を残す。8~10は小型である。4は表皮近くのもので側面を持たない表採資料。5は背



第12图 出土石器实测图 (1/2)

縁を有するもので、スクレイパー状の調整を施す。土壌内出土。6は裏面に大きく原面を残し、両側面とも剥出面側からの剥離で整えている。半舟底タイプに近いが、側面調整の方法が異なる。やはり土壌内出土。8～10は表採資料で、8は上方ないし、背側からの側面調整を施す。9・10の側面は一回の剥離面をそのまま残す。3類は細石刃を剥出する前段階の資料と考えられるものである。7は10に類似した形態である。11は正面方向からの剥離により、側面調整を施したもので、細石刃を剥出する直前の姿であろう。7はE-13区4b層出土。いずれも黒曜石製で、11は大草平周辺に出土する石材を用いる。

**細石刃** (12～32) 調査では12～14、22、24～27の8点が出土し、他は採集資料である。断面が三角形・ないし台形を呈す。12～21・24は頭部片、他は中間部である。23は断面三角形を呈し、稜の両側に側面調整痕を残す。これによれば石核は縁を有していた可能性が強い。14・28には刃こぼれが観察される。87はE-14区3層、13・22は表土層、14はE-15区4a層、24はF-13区4c層、25はE-15区4a層、26はE-15区4b層、27はA-14区4a層出土。すべて黒曜石製。

**搔器** (33・34) 33は円礫の表皮近くの剥片を素材とし、その末端部周辺に調整を施し刃部とする。34は三角錐状の素材の一边に直角に近い調整で刃部を作る。長 4.2cm、幅 2.6cm。34はE-15区4a層出土。両者とも黒曜石製。

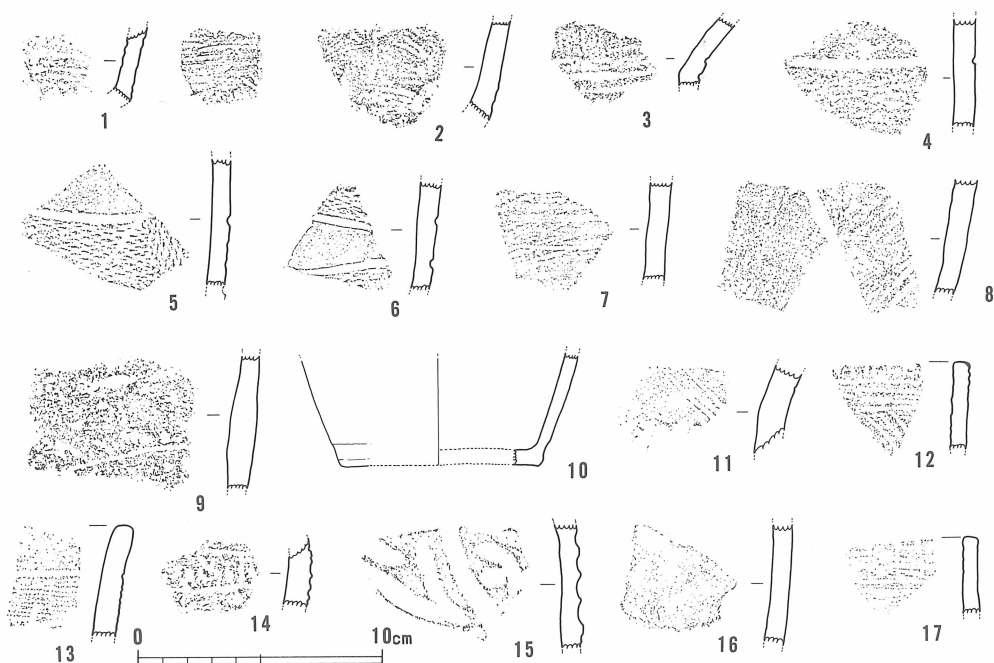
**削器** (35・36) 35は 2.2cmと幅広で、厚味のある縦長剥片の一縁に刃部を持つ。表面には2つの稜線が走り、片側は原面を残す。E-14区4a層出土。36もやはり一縁に表面側からの剥離を施し刃部とする。D-12区4a層出土。

### 3. 縄文時代の遺物

土器、石器が出土したが、量的には極めて少数である。ここでは、調査以前に栗秋恵二氏、今村寿司氏の採集品があるので、併せて報告する。

#### (1) 土 器 (図版5、第13図)

1～10が調査時出土分で、以下は採集品である。1は山形押型文土器の底部付近である。山形文はその形状を留めない程くずれている。底部はそのカーブから平底になると考えられる。早期末であろう。暗茶褐色を呈しK-11区攪乱層出土。2は胴下半部の破片で、器面は横方向の条痕である。F-13区、土壌内より出土した。3は「く」の字近くにくびれる頸部破片で、頸部には2本の沈線が横走する。黒雲母を含み、黄褐色を呈す。K-11区攪乱層出土。4～6は沈線間の無文部と撚糸文で文様を構成する。胴部破片であるが丸味を持たないもので前期前半の塞ノ神式土器である。4はK-8区4層出土。5は表採資料。6はF-12区1層出土。な



第13図 出土土器拓影 (1/3)

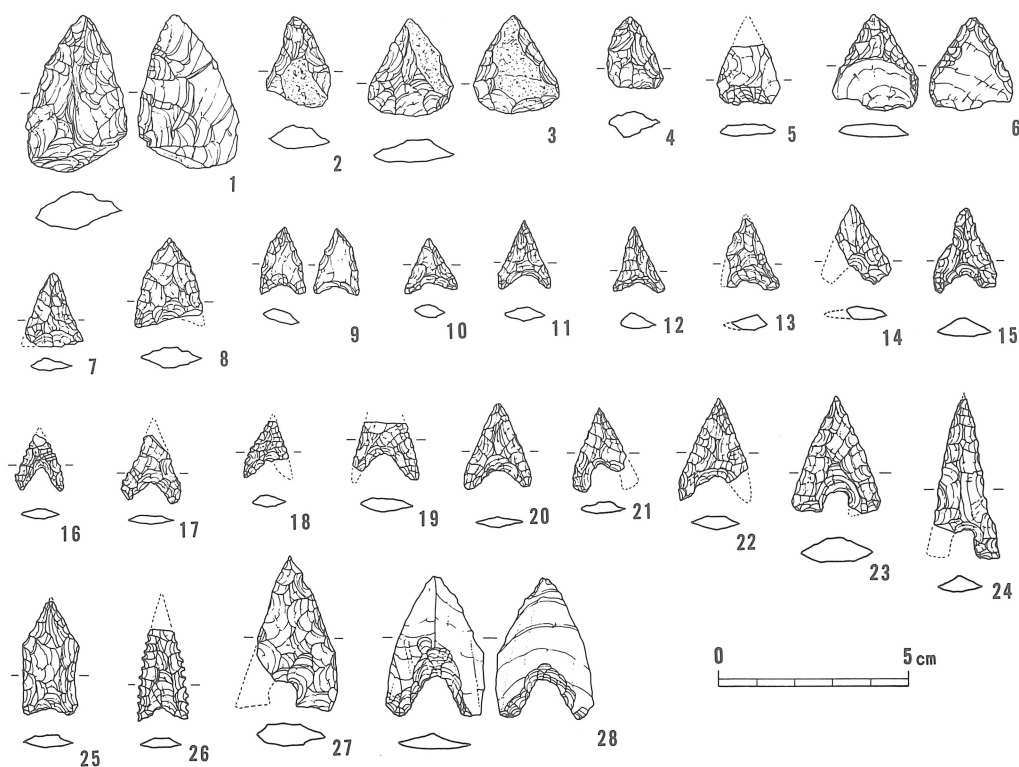
お6の器面には煤が付着する。7は条痕で器面を調整する無文土器。外面に煤が付着する。8は同一個体と考えられる。両者ともK-11区攪乱層出土。9は器面風化しており不明。無文部の破片。10は径8cmに復原できる平底の破片。底部からは膨らみを持たずに立ちあがる。器形から塞ノ神式土器の底部であろう。胎土に安山岩・長石粒を含む。11は頸部近くの破片で、へう先状の2条の斜行沈線が走る。器壁1.3cmと厚く、前期頃か。12は直行する口縁部片で、口唇部には長い刻み目が入る。外面上部は4条の条痕状沈線で、下は斜行の条痕状沈線。内面は凸線状になるが原体は不明。時期は不詳。13も口縁部片で、口縁下は沈線までが無文帯で、以下は燃糸文。前期前半頃か。14は胴部の小破片で2本の沈線間に、横走る刺突文と竹管状工具による深い押引の文様がある。中期初頭の並木式であろうか。15・16は胎土に多くの滑石を含む土器で、15は太く浅い沈線と円文がある。16は無文部の破片で、阿高式であろう。17は直行する口縁部片で、口唇部は平坦である。口唇部から細い刻み目状の沈線が垂下する。器面は内・外とも条痕文である。文様構成、器面調整等12の土器に類似する。外面には煤が付着する。

(2) 石 器 (図版 6・7、第14・15図)

調査で出土したのは石鏃・磨石・凹石の計20点に過ぎない。出土を特に記していないのは、採集品である。

**尖頭状石器 (1)** 凸基状の基部を有す石器で、1 cmと部厚な横長、幅広の剥片を素材とする。基部には原面を大きく残す。長 4.1cm、重10.5 gで黒曜石製。

**石鏃 (2~28)** 2・3は凸基無茎で、両者とも原面を残す。表土層出土で安山岩製。2は 1.9 g、3は 3 g。4~7は平基無茎で、4は先端が片側に寄っている。1.6 g。D-13区 4 b層出土。6は基部側に第一次剝離面をそのまま残す資料で完形品。長 2.6cm、重 2.6 g。7は二等辺三角形の鏃で、調整はやや粗雑。いずれも安山岩製。8~28は凹基無茎の鏃である。8~13はわたぐりの浅いもので、明確な脚部を持たない。8はD-13区 4 b層出土。9は横長剥片を用い、調整は縁辺に限られる。0.8 gを測る。10は 0.5 g。11は0.55 g、12は 0.6 gと軽量である。いずれも安山岩製。11~13は表採資料。14は脚端部が斜めで幅広な鏃である。15は端部が水平に近くなる。15は 1.1 g。両者とも安山岩製で表土層出土。16~20・22は二等辺



第14図 出土石器実測図 (1/2)

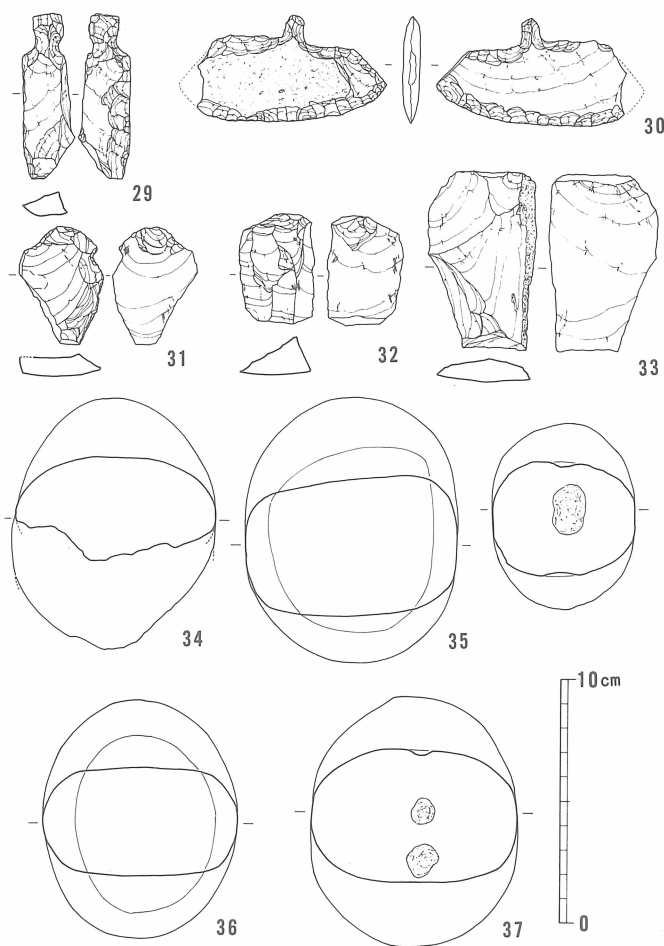
三角形に近く、脚端部が広がり、鋭いタイプで、調整は比較的丁寧なものが多い。16はK-8区3層出土。19は体部破片でD-12区4a層出土。16・18・19が黒曜石で他は安山岩製。21・23・24は二等辺三角形に近く、脚端部が平坦に近くなる。早～前期頃に多いタイプである。23はほぼ完形品で、長3.1cm、幅2.4cm、厚0.6cm、重3.2g。E-12区4b層出土。24は細身で、脚に対して身の部分が極めて長い鏃である。調整は粗雑である。表採資料で、長4.2cm、重2.3g。3点とも安山岩製。25は五角形状を呈す完形品で、わたぐりは浅い。時期の下るもので中期頃であろうか。安山岩製。26はいわゆる鋸歯鏃で、先端部を欠く。ハリ質安山岩製。20・25・26は椋谷小学校蔵。27は23と似た形態を有す大型の鏃で、全体は粗い剥離で整えられている。4.5gを測り、安山

岩製。28は剥片の打点側を基部とし、その末端部をそのまま先端とする、いわゆる剥片鏃である。両縁は剥片のままで、基部のみに調整を施す。黒曜石製で、長3.7cm、最大幅2.5cm、重2.8g。石鏃は他に40点ほど採集され、1点石英製のものがある。

**石匙 (29・30)** 29は縦型石匙で、安山岩の縦長剥片を素材とする。刃部は片側で直線刃である。つまみ部は大きめに整えられる。長6.8cm、幅2.1cm、厚1.1cm、重16.5g。30は幅広の横型石匙で、外弯刃の刃部と、小さなつまみを有す。つまみ部からその周囲にかけても丁寧な調整を施す。安山岩製。

**削器 (31)** 縦長剥片の一边に、細かい調整を施した削器で、良質の黒曜石製。

**剥片 (32・33)** 両者とも



第15図 出土石器実測図 (1/3)



幅広の縦長剥片で32は黒曜石、33は安山岩製。

**磨石** (34～36) いずれも長円形で、部厚い磨石である。34はD-12区3層下部出土。35は上・下、両端とも良く磨かれ、稜が付く。長径10.8cm、短径 8.7cm、厚 5.5cm、重 819 g。36は棕谷小学校蔵。いずれも安山岩系（角閃安山岩？）である。

**凹石** (37・38) 両者とも表採資料で安山岩製である。37は長径10.2cm、短径 8.5cm、厚 5.3cm、重 528 g。全体はあまり磨かれた形跡はなく、片面中央部に小さく浅い凹みを有す。38は小型で、上・下両面が凹む。長径 7.6cm、短径 5.8cm、厚 4.6cm、重 239 g。

## IV お わ り に

大草平遺跡は先土器時代から縄文前・中期にわたる複合遺跡である。

遺跡は耳納山地の南麓の高所（標高 555m前後）に位置する。星野村における当期の遺跡の立地は、水縄山地と星野川流域とに2分される。

耳納山地は、北側（浮羽町）は急峻な崖と成っているが、南側（星野村）は比較的緩傾斜である。標高 550m前後でこの斜面は平坦に近い傾斜を有し、高原状となる。そして、再び急斜面となり星野川へ落ちていく。大草平遺跡をはじめ、合瀬耳納遺跡・センドングラ遺跡・山神遺跡は高原状の遺跡であり、一方、一木遺跡・光延遺跡・千々谷遺跡は星野川ないしその支流が形成する河岸段丘上に位置する。前述したように大草平遺跡は先土器時代～縄文中期、山神遺跡は土器片がほとんど採集されていないが縄文時代早期頃の遺跡である。一方、河岸段丘上の一木遺跡も先土器時代及び縄文早期押型文期の遺跡である点、生活基盤の問題からみて興味深い。また、縄文後期後半頃と考えられる石器を出土した岩野遺跡は星野川右岸の段丘上に立地するが、標高 200m前後の中流部に位置しており、若干ではあるが採集されている弥生時代の遺跡の立地から考えて、縄文後期以降その立地が低地に移行していくものと推定される。

先土器時代の石器は、ナイフ形石器・台形様石器・細石刃核・細石刃が出土した。遺物の分布状態でも記したように、層位的には縄文時代の遺物とも混在している。ナイフ形石器は小型のもので最終末に位置しよう。細石刃核は、黒曜石の円礫ないし、小さな角礫を素材とするもので、大型品は円礫を用いる。背面ないし側面の一方に自然面を残すものが大部分であり、側面調整は上・下からの一回の打撃によるものが多いが、6のように槌状剥離面側のものもある。打面調整は3・4・6に見られるように基本的には行なわれているようだ。7・11は細石刃剥出前の母核であろう。宮崎県船野遺跡第1地点のb類とされる細石核に近似し、細石刃文化のなかでも古期に位置付けられよう。なお、8・11の細石刃核は大草平周辺に出土する黒曜石を用いている。

縄文時代の遺物は前期前半の塞ノ神式土器、中期の阿高式土器の他、尖頭状石器・石鏃・石

匙・削器・磨石・凹石等が出土した。量的には極めて少数で、その大部分は、遺跡周囲の既開墾地の採集品である。地形および遺物の出土状態からして大草平遺跡の中心は、既に花木園となっている東側一帯にあったと推定され、今回の調査地区は、その西側端部と言える。

黒曜石の原石について若干記しておきたい。今回の調査により、4c層～5・6層にかけて親指頭大から以下の黒曜石の原石が多量に出土した（図版6一下）。角礫状で、外面はくすんだ灰黒色、暗灰色を呈す。内は若干透明度は落ちるが黒色を呈すものが大部分で、若干灰色がかったものも見受けられる良質のものである。細石刃核・細石刃・石鏃・剥片等にそれらが認められる。いずれにせよ、福岡県内では最初の黒曜石の産地が明らかになり、今後、この原石の供給先についても問題となろう。なお、安山岩製の石器については、当地域が安山岩を基盤となす点、現地産出のものである事は疑いない。

今回の大草平遺跡の調査は、遺跡の中心部から離れ、資料的には若干貧弱な様相を拭い得ないが、県内では最も高所に立地し、先土器・縄文時代の遺跡らしい遺跡であった。西南方向に連なる熊渡山（960m）・御前岳（1209m）等の山なみは、そのまま大分県・熊本県境へ接し、九重・阿蘇の中部山地へ連なる。こうした山々を背景とした狩猟活動の実体は、今後この地域の良好な遺跡の発見により、より明確になるであろう。

遺跡の南西 200mの崖下には天然の湧水がこんこんと溢れ、我々の喉を潤わしてくれた。

“ひとろし、彼等がそうであったように。



第16図 仁田原小学校児童による発掘風景

## 附

星野村出土の銅矛・和鏡について、若干の説明と図版をあげておく。

### 銅矛（図版10—上）

伝星野村十籠出土とされ、2本が現在教育委員会に保管されている。旧蔵は麻生神社である。

1は長86.7cm、鋒部幅5.9cm、袋部幅は長径5cm、短径3.9cm。2は鋒部を残す破損品で、残存長45.9cm、鋒部幅6.7cmと1より幅広である。両者とも中広銅矛で、良質。遺存状態も良好である。

### 和鏡（図版10—下）

1・2は熊野神社蔵で、箱書に「寛政九丁巳天三月吉日」とある。

1は花亀甲地双鳥鏡で、亀の鈕座に、単圈の内・外区に径6mmの菊花文を配し、双鳥が飛ぶ。径11.55cm。縁は直角式で高さ6mm、幅4mm。室町時代末頃の作であろう。

2は蓬來鏡で、亀の鈕座を有す。内区には洲浜に松を配し、親鶴と子鶴が遊ぶ。径12.1cm。縁は直角式で1.5cmと高く、通称「ボテ鏡」と呼ばれる。外区には「正宗作」の銘がある。江戸時代前期頃の作であろう。

3は松竹梅蝶紋柄鏡で、星野川蛇湊橋上流にて中学生が採集したものである。袖垣に松・竹・梅を、上方の円圈内に蝶を配す。面径17.5cm。直角式の低縁は、高さ3.5mm、幅4mm。柄は長さ9.3cm、幅3cm。柄は鏡面より4mmほどそっている。「藤原金益」の銘が入る。江戸時代中期以降の作であろう。

註 和鏡については九州歴史資料館学芸一課長西村強三氏に御教示いただいた。



# 版 圖





遺跡全景（北から）



遺跡南側近景



遺跡と調査区



D・E・F-12・13区全景と土壌





南側崖面の基本土層



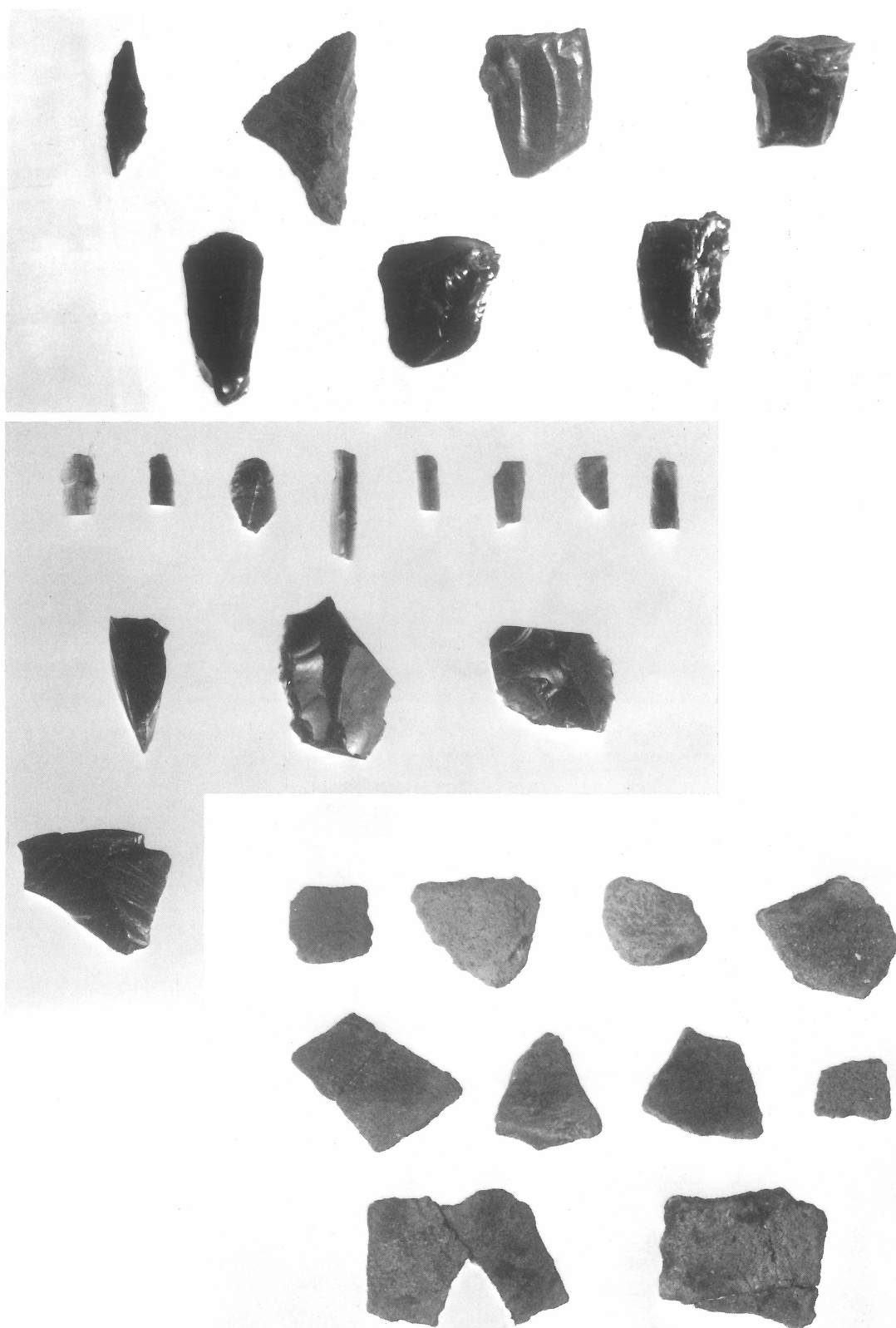
D-13区 西壁土層

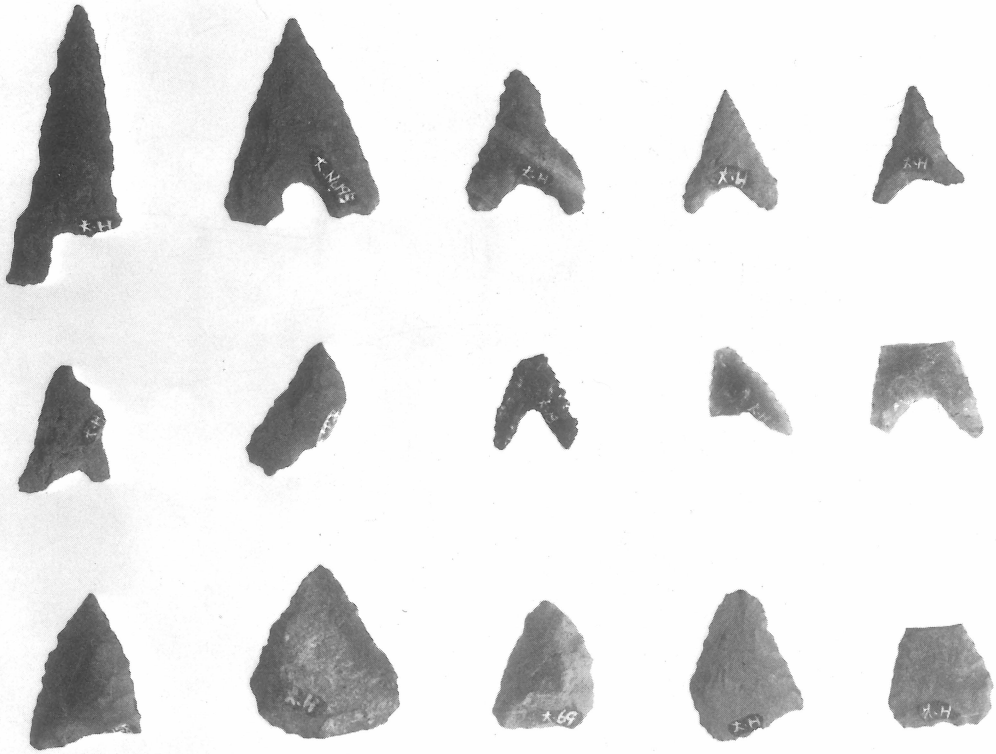


A・B・C-13区 遺物出土状態

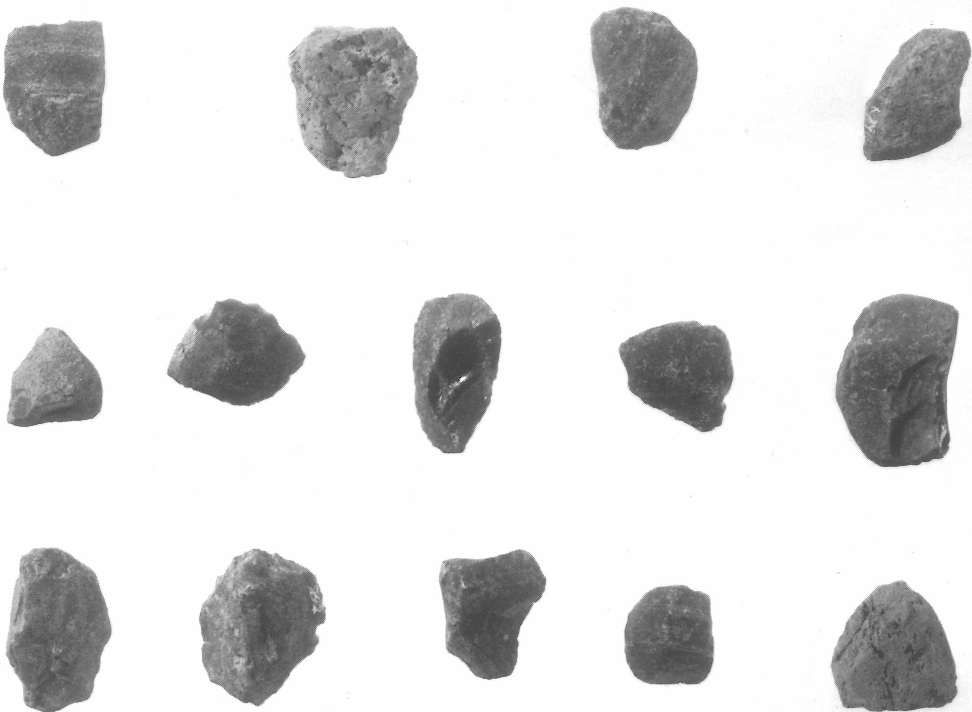
細石刃核・削器・石鏃出土状態





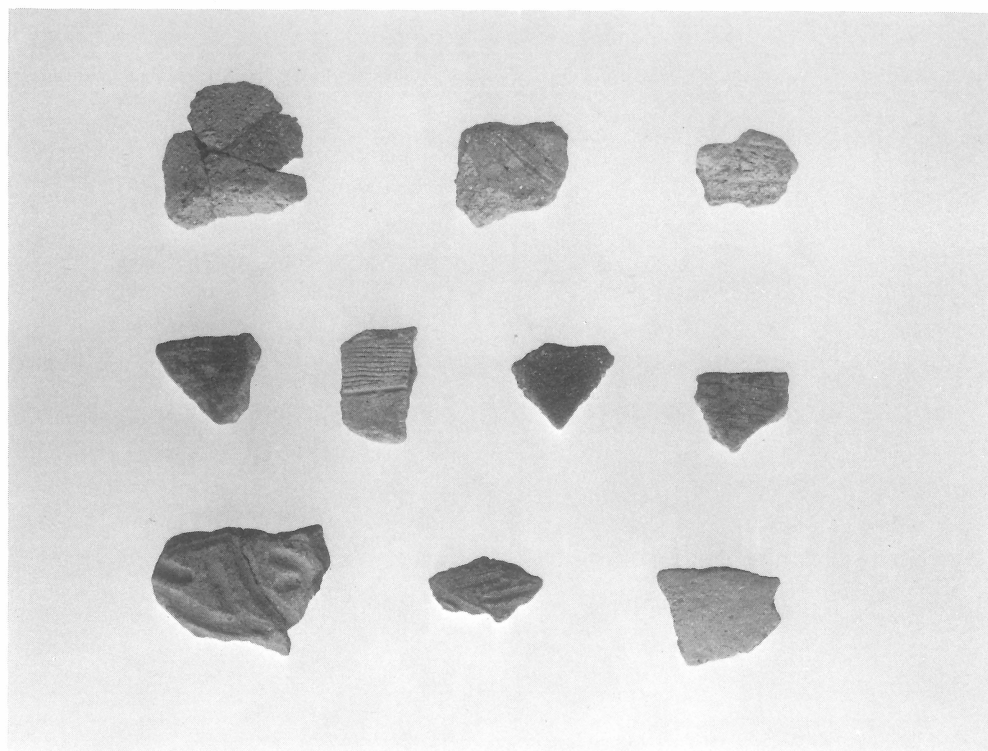


大草平出土 石鏃

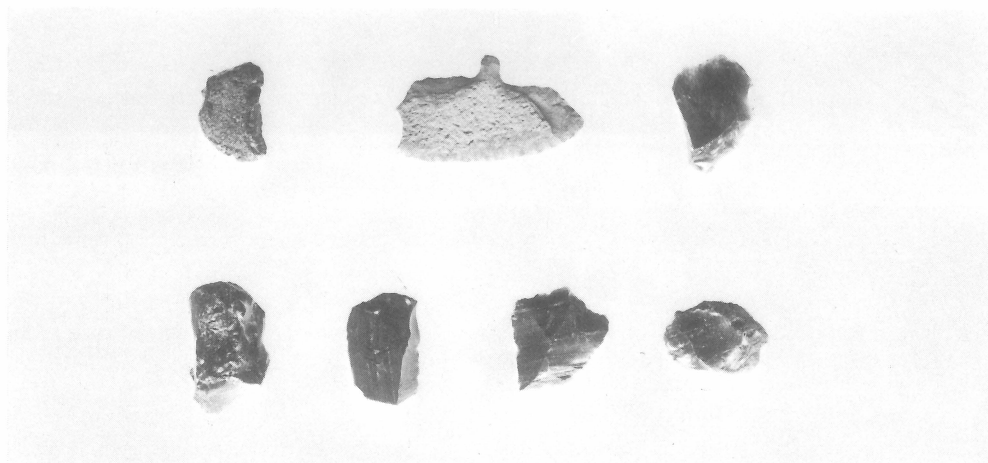


大草平出土の黒曜石原石



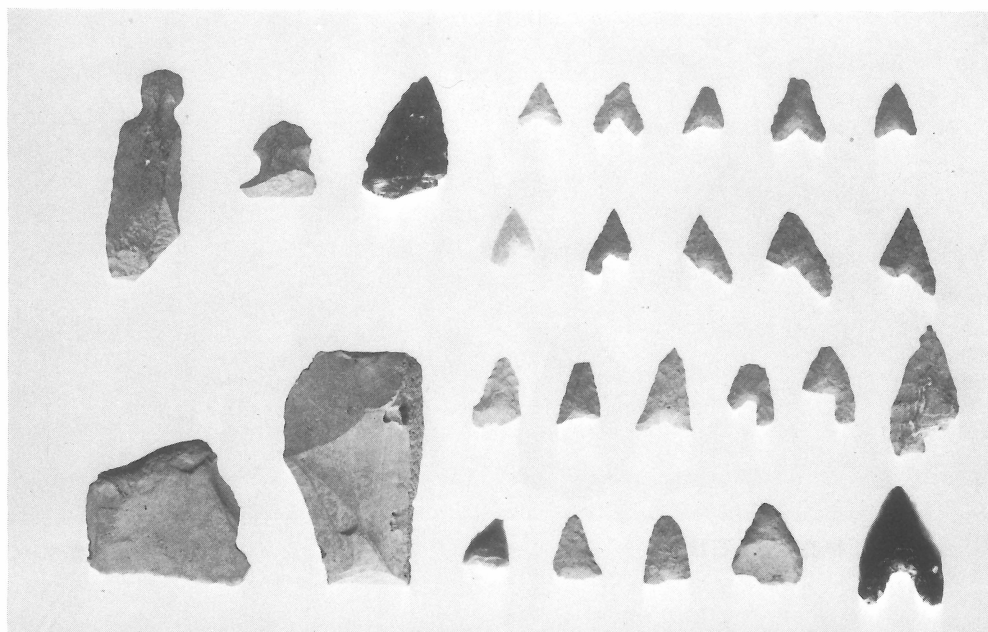


大草平採集  
の土器



石匙ほか

細石刃核

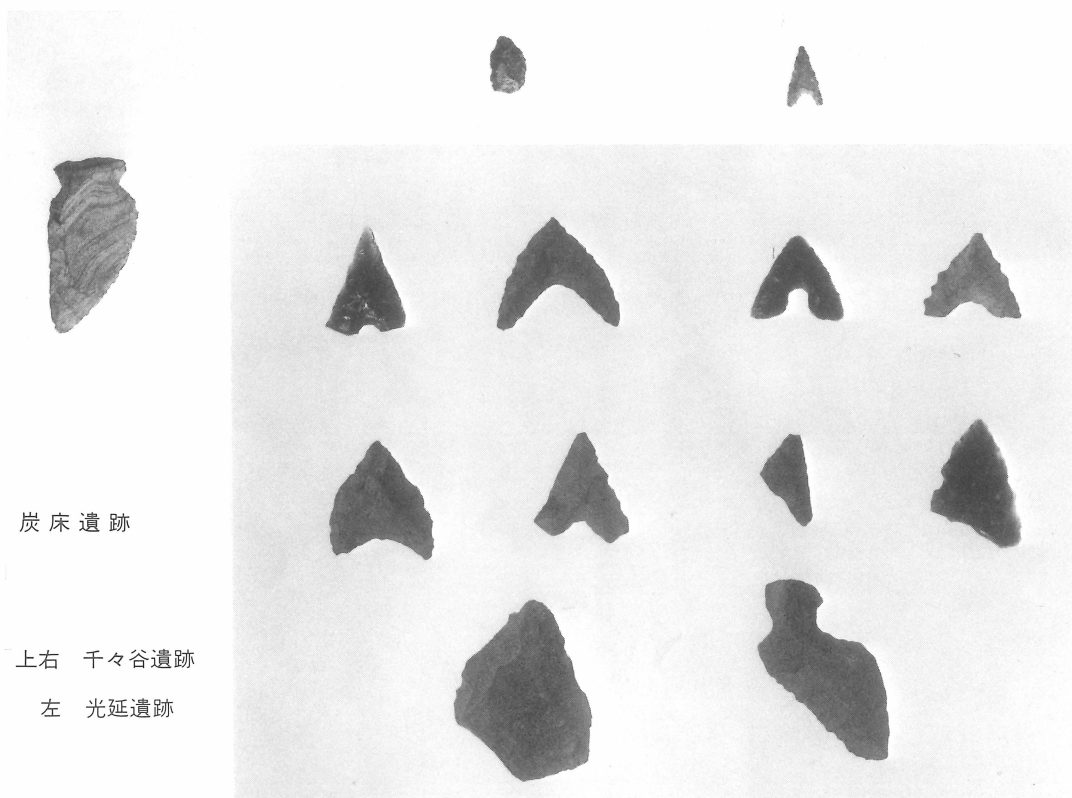


石匙

石鏃ほか



山神遺跡全景

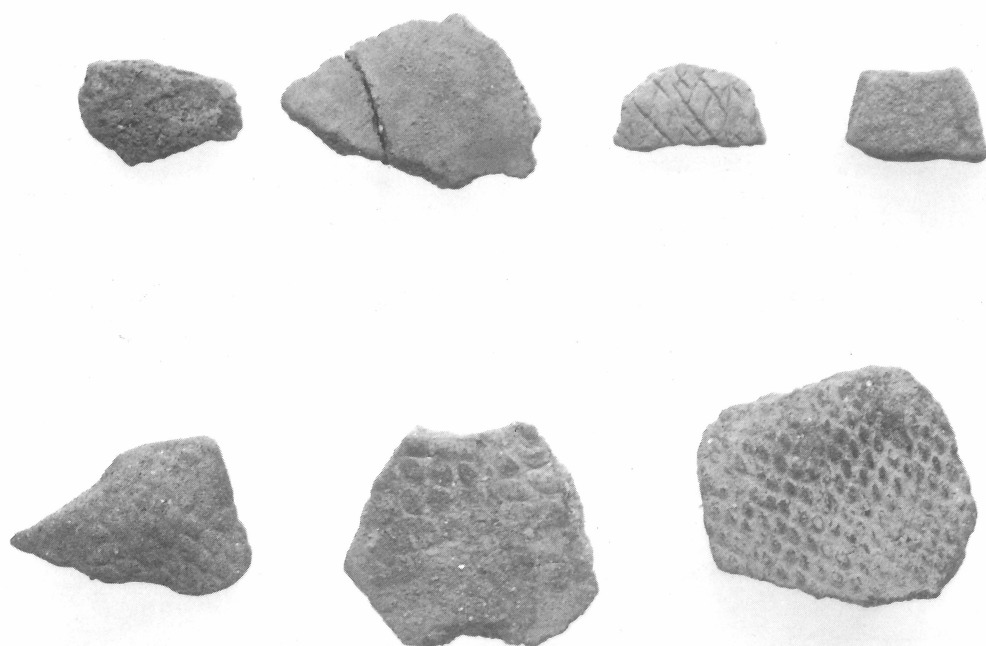


炭床遺跡

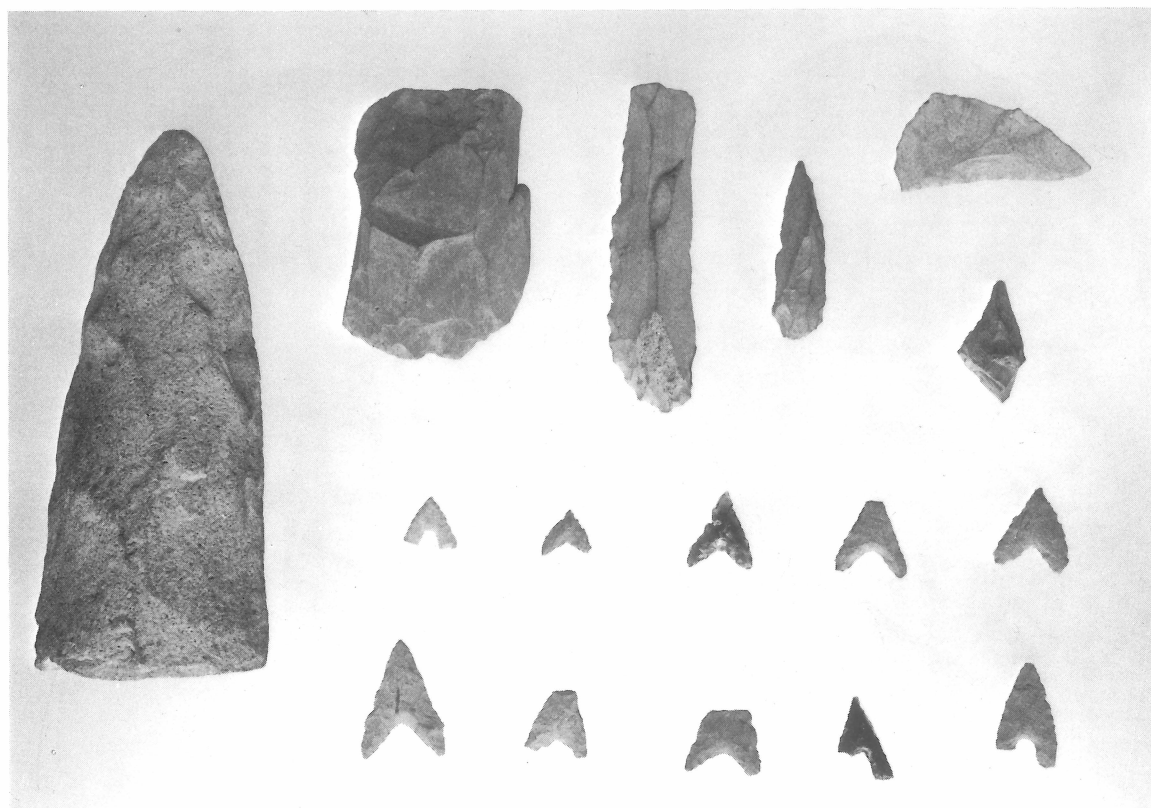
上右 千々谷遺跡

左 光延遺跡

山神遺跡出土石器



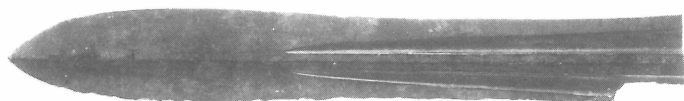
一木遺跡出土土器



一木遺跡出土石器

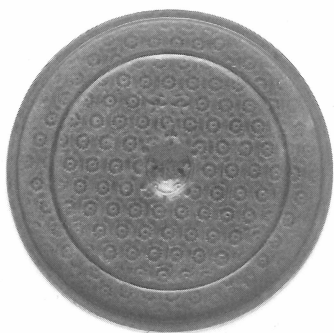


1



2

伝 星野村出土銅矛



1



2



3



# 大 草 平 遺 跡

星野村文化財調査報告書

## 第 1 集

昭和58年 3 月31 日

発 行 星 野 村 教 育 委 員 会  
福岡県 八女郡星野村13102-1

印 刷 青 柳 工 業 株 式 会 社  
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31

